

## 音楽の散歩道 その1

## — 1950,60年代の音楽のひとこま —

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル | 栗 博志・高田 昌実・田島 紘己・上村 章  
 | 加治木温泉病院 | 夏越 祥次 | 東区・荒田支部 | 栗 隆志  
 | 大海・大海宮崎クリニック | 大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

## はじめに

戦後が、昭和が、平成が、そして20世紀が一步、また一步と遠ざかる。

20世紀は、録音と映像の時代であり、多くの音楽記録が残された。然し、一世を風靡した演奏家達は、時代の流れの中に急速に忘れ去られていった。

20世紀末に、複数の音楽雑誌で、20世紀のクラシック音楽の演奏家の中で、誰が後世に名を残すか、という企画がなされた。

その中で、最も妥当と思われるものが、音楽の友社の「不滅の巨匠たち」「続・不滅の巨匠たち」の2冊である。この2冊の演奏者は各々、67名と96名の計163名で、日本人は一人もいない。

更に将来の情勢如何で、名を残す可能性のある人を「現代の巨匠たち」として、111名挙げている。3冊合わせても274名。狭き門である。「現代の」に挙げられている日本人は、小澤征爾、今井信子、五嶋みどり、内田光子、有田正広のわずか5名にすぎない。

音楽は趣味の世界なので、このような企画に違和感を覚える人も多いだろうが、現在の目から振り返ると懐かしい。

今回は、「不滅の巨匠たち」他の数名を挙げてみる。

## 〔1〕レナータ・テバルディ

(1922-2004)

## 戦後日本のオペラの起爆剤

「不滅の」に挙げられた女性声楽家は、わずか6名。然し、彼女達の時代は疑いもなく、オペラの黄金時代であり、膨大な録音が残されている。

オペラ歌手は、歌唱力が基本であるが、更に演目にあった声質、容姿、演技力も必須であり、ハードルは極めて高い。

その6人は、マリア・カラス、エリザベート・シュヴァルツコップ、ビクトリア・デ・ロス・アンヘルス、クリスタ・ルードヴィヒ、ビルギット・ニルソン、それにレナータ・テバルディである。



【図1】

「NHK イタリア歌劇団」1961

色紙の多数の丁寧なサインからは、イタリア・オペラの真骨頂を日本に残そうとした、一行の意気込みが感じられる。

この「Tokyo-1961」と赤書きされた古い色紙の多くのサインを見て、何の色紙か気付いた人は、かなりのオペラ好きと言えよう。

テレビが日本で普及した時代に、「NHK イタリア歌劇団」と称した一行が来日し、日本の音楽ファンに向けて、オペラ公演が行われた（図1）。

この公演は、56年の第1次から、76年の第8次まで続いた。第1次は、アントニエッタ・ステッラ、ジュリエッタ・シミオナートが、59年の第2次にはシミオナートが来日した。

この色紙は、61年の第3次のもので、テバルディ、シミオナート、マリオ・デル・モナコらが来日。ジョルダナーノ「アンドレア・シェニエ」、ヴェルディ「リゴレット」「アイダ」、プッチーニ「トスカ」、マスカーニ「カヴァレリア・ルスティカーナ」など、御馴染みの曲が演奏された。

オペラ・ファンは、全盛期のテバルディに熱狂した。入場料は800～2800円。

この公演は、日本のイタリア・オペラ史上、最大のイベントであった。この色紙が私の手元にあるのは、最大の幸運である。

テバルディは、第2次大戦で破壊されたスカラ座の、46年の再開記念コンサートで、イタリアの指揮者・アルトゥーロ・トスカニーニに認められ、24歳の若さで、スカラ座デビューを果たした。

「不滅の」に選ばれたイタリア人のトスカニーニは、20世紀の頂点に立つ指揮者の一人なので、若干の説明をする。



【図2】ベルリンのイタリア大使館での大指揮者達 1929、左よりワルター、トスカニーニ、E. クライバー、クレンペラー、フルトヴェングラー

（付録）アルトゥーロ・トスカニーニ (1867-1957)

トスカニーニは、ヴェルディ、プッチーニ、レオンカヴァッロ、カタラーニなどの作曲家と親しかった（図2）。1901年1月27日のヴェルディの死に際し、2月1日にスカラ座は、トスカニーニの指揮の下、カルーソ、タマーニョらによる大演奏会を催した。2月27日には、30万人の群集の中、トスカニーニの指揮で、8千人の合唱団が、第2の国家とも言われる「ナブッコ、行け我が思いよ 金色の翼に乗って」を歌いながら行進し、ヴェルディ夫妻の遺体を、墓地から「音楽家憩の家」に運び埋葬した。

トスカニーニは、レオンカヴァッロ「道化師」、プッチーニ「ラ・ボエーム」「西部の女」「トゥーランドット」他、ジョルダナーノ、ボーイトの6つの名作オペラをスカラやメトロポリタン他で初演したが、このような指揮者は、他に例を見ない。

ヴァーグナー、チャイコフスキー、ムソルグスキーらの数多くのオペラのイタリア初演を果たすと共に、バイロイト（ドイツ人以外の最初の指揮者）、ザルツブルグでも数多く指揮、ルツェルン音楽祭を創設。

1898年スカラ座、1928年にはニューヨーク・フィルの音楽監督や首席指揮者を歴任。37年には、米国で選りすぐりの演奏者を集めた、自身のためのNBC響が用意された。当時は、ラジオ放送の全盛時代で、ラジオ電波により音楽が全米に拡がっていった。

1954年、放送中に一過性の記憶（意識）消失を来し、これを期に直ちに引退した（この時の全演奏を、ブルノ・ワルター協会提供の音源で聴く事ができる）。

トスカニーニは、独のフルトヴェングラーと共に、20世紀前半を代表する大指揮者であり、その後、独のカラヤン、米のバーンスタインの時代が到来する。

テバルディが、1950～60年代のスカラ座の、そしてオペラの黄金期に、カラスと人気を二分した事は、よく知られている。

男声と女声では生来、高音の声域に限定す



れば女声の方が広く、(一般的に言って、その他の理由による男性歌手の人気は別にして)、その点に於ては、基本的に男声は女声の相手にならない(もちろん、男性がいなければオペラ自体が成り立たないが)。

特にカラスのように圧倒的なスケールとテクニックを具備し、容姿と演技力(感情表現)に秀いでた、ドラマティコ・ダジリタの前では、男声は手も足もでない(全くの個人的見解です)。

リリコ・スピントのテバルディが、カラス

と人気を二分できたのは、彼女の性格の良さと、艶があり伸びの良い美声によるものであろう。

当時、イタリア・オペラ史上、最も美しい声と言われ、厳格極まりないトスカニーニにさえ「天使の歌声」と絶賛された。

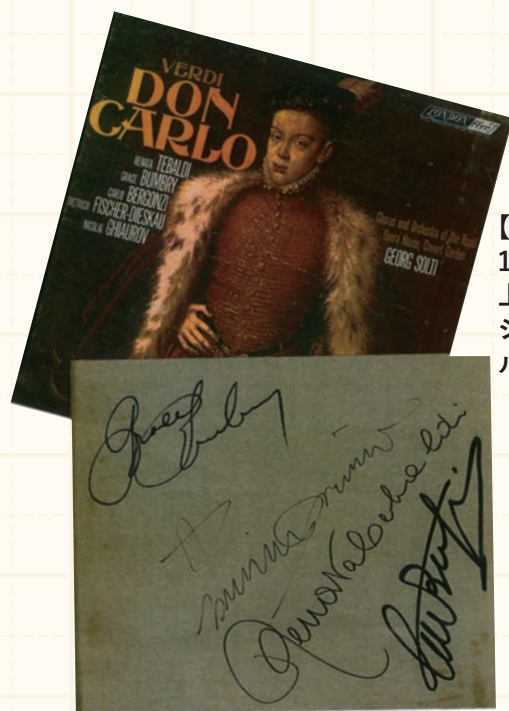
然し、カラスの台頭の前に、テバルディは55年にスカラ座を去り、「オテロ」のデズデモナ役で、メトロポリタン歌劇場に活動拠点を移した。彼女の歌唱は、オペラ全曲(少なくとも38組)他で楽しむ事ができる。

【図3】テバルディ、カラヤンの「アイダ」  
箱裏のラジオ・プロモーション用の印



【図4】  
上:「アイダ」録音中のテバルディ  
下:ファンのためのサイン

【図5】カタラーニ「ワリー」  
1968  
ファンのためのサイン



【図6】ヴィルディ「ドン・カルロ」  
1965  
上よりグレース・バンブリー、フィッシャー・ディスカウ、テバルディ、カルロ・ベルゴンティのサイン



【図7】メトロポリタンでのカラスとテバルディの劇的対面、ルドルフ・ビンゲと、1968

図3は、ヴィーン・フィル、カラヤンとのヴェルディの「アイーダ、1959」である。箱の裏面に「非売品 ラジオ・プロモーション用」の印が押してあり、ラジオが重要な広告媒体であった事が分る。

図4は、録音の合間にカラヤンと談笑するリラックスしたテバルディら。ファン・サービスのテバルディのサインも見られる。

図5は、カタラーニの「ワリー、1968」である。豪華なキャスティングである。サインが2ヶ所にあり、彼女のファン・サービスぶりが知られる。

図6は、コヴェント・ガーデンでのショルティ指揮のヴェルディ「ドン・カルロ、1965」である。箱裏に黒い真珠・グレース・バンブリー、フィッシャー・ディスカウ、テバルディ、ベルゴンツィのサインのある豪華版。

1968年、対立していたカラスとテバルディは、メトロポリタンで劇的対面を果たした。中央はメット総支配人のルドルフ・ビング(図7)。

## 〔2〕ジャクリーヌ・デュ・プレ

(1945-87)

16歳で2挺のストラディヴァリウス・チェロを贈られた少女

テバルディが来日した61年、16歳の少女が、ロンドンのヴィグモア・ホールでデビュー。同年、エルガーのチェロ協奏曲で注目をあびる。

そして支援者から、1713年製のストラディバリウスのチェロの銘器「ダヴィドフ」を贈られた。ロシアの名チェリスト、カルル・ダヴィドフが所持していたからである。実は、彼女はデビュー以前にも、他の支援者から、1673年製のストラッド・チェロを贈られていた。彼女の死後、この銘器は「デュ・プレ」と名付けられた。

わずか16歳の少女が、2挺ものチェロを贈られるとは信じられない事である。というのは、ストラッド・チェロは、ストラッド・ヴァ

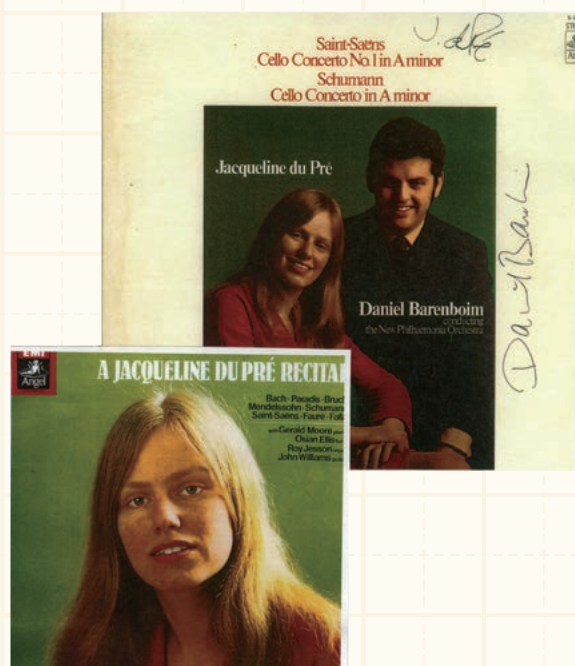
イオリンのわずか1/6以下しか現存していない貴重な楽器だからである。

大部分が16歳の時に録音されたLPを聴けば、彼女の優れた演奏を感じとれる。日本の若手新人演奏家の場合は多分、高度な技巧を誇示する、俗に難曲と言われる曲をリリースされ、「天才」などと喧伝される事になるだろう。多くの日本の聴衆も、それらの宣伝に飛びつく事になる。だがデュ・プレの場合は異なる。素直である(図8下)。ただ、このアルバムで伴奏しているのが、ピアノのジェラルド・ムーア、オルガンのロイ・ジェスン、ハープのオー吉安・エリス、ギターのジョン・ウィリアムという当代を代表する奏者達である事に驚かされる。

この少女ジャクリーヌ・デュ・プレは、1966年、21歳の時にピアニスト・指揮者のダニエル・バレンボイムと結婚した。

然し、26歳の時、MS(多発性硬化症)を発症し、27歳で演奏家を引退した。最後の15年間は、ほぼ寝たきり状態で、1987年に42歳で死去。ダニエルは、ジャクリーヌの死を待って、ギドン・クレーメルの前妻と再婚した。

ジャクリーヌの演奏活動は、わずか10年にすぎなかった。



【図8】ジャクリーヌ・デュ・プレとバレンボイム



然し「不滅の巨匠たち」の12名の弦楽器奏者の名だたる巨匠達、即ち、カザルス、ハイフェッツ、シゲティ、グリユミオー、ロストロポーヴィチ、セゴビア、スターンらにまじって、唯一の女性として選ばれている。

図8上のサン・サーンスとシューマンのチェロ協奏曲のLPには、ジャクリーヌとダニエルの2人のサインが書かれている。

ダニエルには全く興味はないが、若かりし頃のジャクリーヌを思い出させてくれる貴重なアルバムである。

### 〔3〕 ヘルベルト・フォン・カラヤン

(1909-1989)

20世紀後半を代表する指揮者

その好悪は別として、20世紀後半のクラシック音楽界に最大の影響を与えたのは、カ

ラヤンであろう。音造りもそうであるが、カラヤンの指揮を映像で見ていると、そのカリスマ性など、流石と言わざるを得ない。

彼は、1954年の単身初来日以来、88年までに11回来日している。初回は、1ヶ月に亘り、N響を17回指揮した。第2～9回がベルリン・フィル、第10回が、ヴィーン・フィルとの来日である。

図9の大きいポートレートは、54年の記念すべき初来日の時のものである。右下のサインには、日付けが記載されていないが、左下にコロムビア・レコードのロゴ・マークが付いているので、54年のものと分る。

1954年の初来日の年、ドイツ音楽界の重鎮・フルトヴェングラーが死去した。それに伴いカラヤンは、ベルリン・フィルの終身主席指揮者兼芸術総監督に就任。この地位を89年に辞任したが、その3ヶ月後に死亡した。



【図9】初回来日時のカラヤン，1954

56年にはヴィーン国立歌劇場の芸術監督にも就任。更にヴィーン・フィル、スカラ、ザルツブルグなど世界中を飛び回り、オーケストラを指揮した。

私の手元には、テバルディの初来日、1961年のザルツブルグ音楽祭のサイン帖がある。中には、78名の演奏家らのサインがある。

ザルツブルグ音楽祭は、第1次大戦後の1920年、指揮者・パウムガルトナー、R. シュトラウス、詩人・ホーフマンスタールらの提唱により、第1回「ザルツブルグ・フェスティバル」が、ホーフマンスタールの演劇「イエーダーマン、Jeder Mann」のみの上演で始まり、21年からコンサート、22年にオ

ペラの上演も加わった。

以後、「イエーダーマン」は、音楽祭開幕時に今日まで上演されており、サイン帖にも沢山の俳優のサインがある。

56年にカラヤンが音楽芸術監督に就任して以来、代表的音楽祭となっている。

このサイン帖には、パウムガルトナー（モーツアルテウム音楽院・院長時代の弟子にカラヤンがいる）他、当時を代表する音楽家が沢山入っているが、3人のみ紹介（図10）。

図10の右上はカラヤン（説明は略）。

図10の下は、カール・ベーム。ベームは、この音楽祭で「バラの騎士」「コシ・ファン・トゥッテ」を振っている。

彼は「不滅の巨匠たち」にも選ばれており若干説明する。

1927年ダルムシュタット市立歌劇場の音楽監督に就任したが、そこで後のメットの名物総支配人のルドルフ・ビンゲと知り合う。

ベームは、ウィーン国立歌劇場総監督にも就任。1955年には、戦争で焼失した同歌劇場の再開記念公演の指揮を行った。ウィーン・フィルの創立125周年記念には「名誉指揮者」

の称号を授与された。

1981年の死に際しては、カラヤン、レヴァイン、アバド、ポリニ、ヨッフム、カルロス・クライバー、ショルティが追悼演奏会を、ベルリン・フィルは、指揮者無しの演奏会を行った。

図11は、死の前年の1980年の貴重な夫婦のサインである。上が夫カール、下が妻のサイン。ベームは、63, 75, 77, 80年の4回来日している。

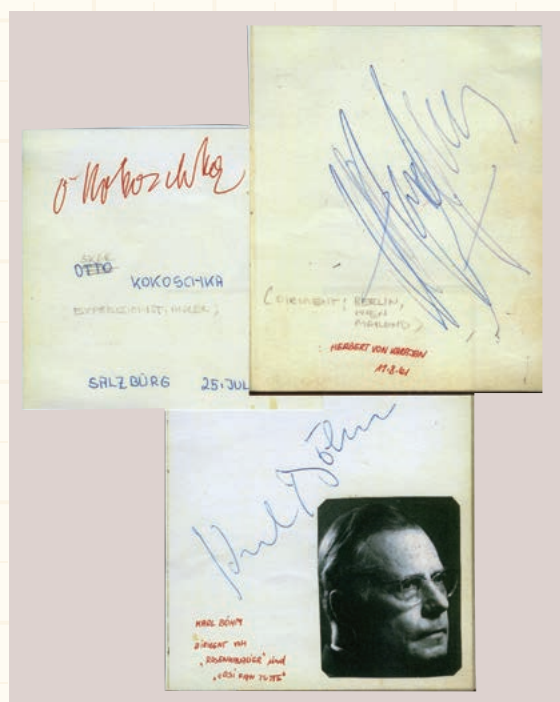
図10の左上は、オスカー・ココシュカのサインである。

シーレ、クリムトラと共に、近代オーストリアを代表する画家、ココシュカがなぜここにいるのか不明だが、ピカソやシャガールのように舞台美術を担当したのだろう。

アルマ・マラーは、西洋音楽史上、最も有名な女性の一人であるが、ココシュカは、作曲家グスタフ・マラーの夫亡人となったアルマと一時期、親しかった事はよく知られている。

図12は、ココシュカの代表作として知られる「風の花嫁」である。

（つづく）



【図10】ザルツブルグ音楽祭，1961  
右上：カラヤン  
下：ベーム  
左上：ココシュカ



【図11】カール・ベーム夫妻のサイン 1980  
上は夫カール，下は妻のサイン



【図12】  
ココシュカの代表作  
「風の花嫁」